



壬辰・丁酉倭乱における朝鮮人被虜の末裔 : 乃木希典の由緒

添田, 仁

(Citation)

海港都市研究, 創刊:101-114

(Issue Date)

2006-03-24

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/80030010>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80030010>



壬辰・丁酉倭乱における朝鮮人被虜の末裔

— 乃木希典の由緒 —

添 田 仁

(SOEDA Hitoshi)

はじめに

本稿は、秀吉の朝鮮出兵（本文中は、「壬辰・丁酉倭乱」に統一する）によって日本に拉致連行された朝鮮人被虜とその末裔について考察し、近世・近代における彼らの生き様と彼らを取り巻く社会的環境の一端を明らかにすることで、日本における朝鮮人観について考える一助とするものである。

壬辰・丁酉倭乱における朝鮮人被虜については、これまでも多くの研究がなされてきた。まず、朝鮮人被虜について研究史によりつつ簡単に説明しておく¹。

秀吉による壬辰・丁酉倭乱によって、2万人とも3万人ともいわれる数の朝鮮人被虜が日本に拉致連行された。とくに丁酉再乱における被虜の数は、壬辰倭乱の10倍であったともいわれる。これには、単純に日本軍による捕虜だけでなく、人買い集団によって無差別に拉致された老人・婦女・子供などの非戦闘員も多く含まれた。彼らが連行された先は、中国・四国・九州地方など日本軍の中心となった西国大名諸藩が大半であったが、その他にも、江戸・和歌山・大坂・京都・名古屋・駿府といった当時の政治・交通の要衝や徳川一門の領地が多かったようである。では、彼らは何のために連行されてきたのだろうか。内藤氏は、その理由として、①内地における労働力補充のため、②茶の湯の流行と陶工の渡来、③女子や童子たちのなかでもその美貌や才知などから、④戦争中の日本軍協力者、⑤朝鮮の戦場で妻帯したため、という5点をあげている。そのうち多くは、朝鮮出兵への大量軍事動員によって不足した内地の労働力不足を補うためのものであり（①）、彼らは農業や各種普請（城郭整備、河川・港湾整備）などにおいて「奴僕」として使役され、また東南アジア・ヨーロッパなどに転売もされていた。

1 朝鮮人被虜連行の実態については、丸茂武重「文禄・慶長の役に於ける朝鮮人抑留に関する資料」（『国史学』61、1953年）、内藤雋輔『文禄・慶長役における被擄人の研究』（東京大学出版会、1976年）、北島万次『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』（校倉書房、2002年）から多くを得ている。

丁酉再乱後の和睦交渉においては、彼ら朝鮮人被虜の本国への送還も主要条件に含まれており、本国に帰還した被虜の数は記録に残るだけで7500人に及んだ。しかし、この数は2～3万人といわれる被虜の数と比べるとかなり少ない。つまり、日本に被虜として連行され、そのまま日本に在住し帰化した者が多くいたことがわかる。その要因としては、朝鮮本国自体が満州族による侵攻をうけて、日本との綿密な戦後交渉よりも北部防備の強化に専念する必要が生じたことも大きかった。しかし一方で、本国からの送還の勧誘に応じない者も多かったようである。その大半は、日本で日本人の妻と結婚し、妻子に心を惹かれて帰国を断念した者たちであったが、本国の情勢は不安定で政府の対策もなく、帰国しても路頭に迷って軍や奴隷にされるだけといった噂が流れたために帰国を渋る者もいたようである。

さて、日本に残った多くの朝鮮人被虜、そして彼らの末裔は、如何にして江戸時代を生き抜いたのか。藤原惺窩とも親しく、朝鮮朱子学の代表的な学者として日本でも敬愛された姜沆など文才すぐれた文人・宗教家などは多かったが、彼らは比較的優遇されていた。また、戦国期茶の湯の隆盛とともに各地に多くの焼き物をもたらした朝鮮人陶工も多い。とくに薩摩藩の苗代川は、「苗代川者他所に縁組御法度に被仰出、他所より入来候事御免許、依而其後も段々入来候女子共有之候事」²とあるように、外部へ嫁ぐことを禁止されたかたちで隔離集住させられていた朝鮮人陶工の村である³。この地で製作された陶器は、のちに薩摩焼と呼ばれて全国に流通することとなるが、有田焼・萩焼など、現在も各地の名産品となっている陶器の大半は、当時連行されてきた被虜によるものである。一方、長崎や金沢などの各地で、一般の町人の中に被虜やその末裔が多くいたことも報告されている⁴。

以上、文人・宗教家・陶工・町人などとして生きた朝鮮人被虜の概要を見てきたが、本

2 「古記留渡海以来事件」(『鹿児島県史料集1 薩藩政要録』、鹿児島県立図書館、1960年)。

3 この政策によって苗代川には、朝鮮の伝統的な風俗が永く残ることとなった。薩摩藩の地誌である『三国名勝図会』(原口虎雄監修、第1巻、新潮社、1982年)には、苗代川に住みついた朝鮮人の心の拠りどころとなっていた玉山宮での神舞の様子が描かれている。なお、この苗代川の出身で、東条英機内閣において外務大臣を勤めた東郷茂徳は、自らが朝鮮人被虜の末裔であることを公表していた。詳細は、萩原延壽『東郷茂徳—伝記と解説』(原書房、1985年)を参照のこと。

4 内藤前掲書(註1)、共同研究(代表:鶴園裕)『日本近世初期における渡来朝鮮人の研究—加賀藩を中心に—』(1990年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、1991年)、中村質①「壬辰丁酉倭乱の被虜人の軌跡」(『韓国史論』22、1991年/同『近世対外交渉史論』所収、吉川弘文館、2000年)など。ちなみに、大石学①「研究余録 近世日本における朝鮮人」(『日本歴史』688、2005年)において、「平戸町人別生所糺」(『九州史料叢書37 長崎平戸町人別帳』、1965年)をもとに「平戸藩城下町の朝鮮人」について考察した箇所があるが、同史料はすでに中村質氏が詳細に分析しているように長崎平戸町における朝鮮人被虜の史料であって、「平戸藩城下町の朝鮮人」については明らかにならない。

稿では、武士として江戸時代を生き抜いた朝鮮人被虜とその末裔について検討することで、前述の課題に迫りたい。その際、とくに彼らが残した由緒書を中心に検討する。自家の系譜を記した由緒書は、江戸時代の武士社会において、自家の正統性を主張し、また自己のアイデンティティを確立するためには不可欠のものであった。それゆえ、彼ら朝鮮人被虜の末裔が自らをどのように位置づけ、また周囲が彼らをどのように認識していたのかを考える上では格好の素材と考える。以下、すでに明らかになっている事例から、江戸時代を武士として生きた朝鮮人被虜の末裔についてまとめた上で、長府藩士乃木家の由緒と、その近代における変化を分析することで、日本における朝鮮人観の推移について考えてみたい。

1. 武士社会における朝鮮人被虜

無論その数は僅かであるが、武士のなかにも朝鮮人被虜とその末裔がいた。

まず藩士であるが、前田加賀藩では、11家（細工人・絵師・医者・学者などの技術者を除くと3家）が俸禄を支給され藩士家として存立していたことがわかっている⁵。そのなかには、漢陽の翰林学士（詔勅を作る役人）の子で、7歳の時に宇喜多秀家によって日本に拉致連行され、算用場奉行や金沢町奉行まで勤め、知行1000石を支給された脇田直賢（金如鉄）のような者もいた。また毛利萩藩においても、7家（技術者を除くと4家）が確認され、天保改革の指導者として有名な村田清風を出す家（分家）も含まれている⁶。さらに、臼杵・森・佐伯・岡などの豊後諸藩でも5家ほど確認されており、江戸家老までのぼりつめた豊後森藩の朝山家なども見られる⁷。その他、熊本・佐賀・広島・岩国・土佐・徳島・小野・津・和歌山・久居などの各藩にもそれぞれ若干名ずつ確認されている⁸。

御家人のなかにも朝鮮人被虜とその末裔は見られた⁹。なかでも御家人染木氏は『寛政重修諸家譜』において、「先祖は朝鮮の人にして、姓は李氏なり。正信本朝にいたり、天樹院（千姫—筆者註）御方につかへ、おほせによりて染木を称す」とし、また始祖である正信の項にも「豊臣太閤朝鮮を征伐するの時、片桐市正且元かの國にをいて姉弟二人の小児をいけどり、日本にをくる。天樹院御方大坂に居たまふのとき、且元より二人を唐土の

5 中野節子「加賀藩家臣団編成と脇田直賢（如鉄）」（鶴園前掲報告書（註4）所収、1991年）。

6 木部和昭「萩藩における朝鮮人捕虜と武士社会」（『歴史評論』593、1999年）。

7 中村質②「秀吉政権と壬辰倭乱の特質」（『アジア』8、1992年／前掲『近世対外交渉史論』（註4）所収）。

8 中野前掲論文（註5）、大石学②「史料散歩 近世日本社会の朝鮮人藩士」（『日本歴史』640、2001年）など。

9 大石学③「研究余録 近世日本社会の朝鮮人」（『日本歴史』655、2002年）、同前掲①論文（註4）。

童子の風俗に粧ひ、臺にのせてまいらす。姉を早尾といふ。弟はすなわち正信なり。ともに身を終るまで天樹院御方につかへ、正信は土圭間の取次役を勤む」¹⁰と、朝鮮人被虜としての由緒を明確に記していたことが明らかになっている。また、武士ではないが、秀吉の妻北政所や3代將軍徳川家光、吉川広家などに侍女として仕えた者のなかにも被虜が含まれていた¹¹。

繰り返しになるが、江戸時代に武士として生活できた被虜はごく僅かで、彼らの存在も例外中の例外である。彼らの大半は無理矢理に連れてこられ、望郷の念に駆られながら、やむを得ず日本に滞在せざるをえない人々であった。前述した加賀藩の脇田直賢（金如鉄）が、領内の景色を見て故郷の景観を思い出し懐旧の涙を流したことからわかるように、彼らの胸中に去来する感情は察するに余りあるものだったであろう。しかし注目すべきは、彼らが日本人社会においても、朝鮮人としての民族的意識を失っていなかったことである。

今回取り上げた武士の事例は、後年に作成された彼らの由緒書における記載から集めたものである。由緒書に記載されたということは、彼らが自らの朝鮮人被虜としての出自を隠蔽するのではなく、逆に内外に主張することに努めていたことを示す。また、一方で、武士社会において、朝鮮人被虜もしくはその末裔という出自だけで公然と蔑視するような社会的基盤が存在していなかったことをも示すものである¹²。たしかに、彼らの役職の多くは、当初、番役・馬廻などのいわゆる「武の世界」ではなく、「側近・小姓、医師等医学関係、漢学・儒学関係の粹」といった「文の世界または芸能の世界」に含まれるものに偏っていた¹³。しかし、これは朝鮮人被虜に対する差別ではなく、「日本の武の社会では、朝鮮人に対し文の社会に適した人々という通念が既にできていた」ためであって、周囲の武士が彼らに「異能者としての人間を見いだしていた」¹⁴上での適材適所としての措置であったと思われる。実際、彼らの縁戚関係を辿ってみても、藩内外の武士との間に養子・婚姻関係を結んでおり、外国人家系としての差別などは見出すことができない¹⁵。これらの意味でも、近世武士社会における朝鮮人被虜とその末裔の家に対する周囲の対応は、やはり「近代日本が植民地下朝鮮において安価な労働力商品としての朝鮮人を見だし、炭坑そのほかの過酷な労働現場にまさに労働力移入として連行したものと異なった近世的

10 『新訂寛政重修諸家譜 第22』（統群書類従完成会、1966年）、357～358頁。

11 内藤前掲書（註1）。

12 片倉穰・笠井純一「加賀藩における渡来朝鮮人」（鶴園前掲報告書（註4）所収、1991年）。

13 中野前掲論文（註5）。

14 鶴園裕「近世初期渡来朝鮮人研究序説－「少年捕虜」に関する覚え書き－」（同前掲報告書（註4）所収、1991年）。

15 片倉・笠井前掲論文（註12）、中村②論文（註7）など。

な特徴¹⁶を持っていたと言えるのではないだろうか。

近世武士社会における朝鮮人被虜について以上のようにまとめた上で、以下、新たな個別事例として、長府藩において武士として生きた朝鮮人被虜の末裔である乃木家について具体的に分析する。

2. 長府藩士乃木家の由緒

(1) 「藩中略譜」と朝鮮人被虜

長府藩は、長門府中（現、下関市長府）に城下町を持つ毛利萩藩の支藩で、毛利元就の孫にあたる毛利秀元を藩祖とする¹⁷。石高は、近世を通しておおよそ5万石程度であったが、当時国内流通の拠点として「西國第一の大湊」¹⁸と評された赤間関を領有しており、北前取引でもある程度の財をなしていたようである。なお赤間関は、壬辰・丁酉倭乱に際しても、京都・大坂と肥前名護屋を結ぶ交通・流通の要衝であった。藩祖秀元も、壬辰倭乱に毛利軍の総大将として参戦するだけでなく、丁酉再乱においては全軍の総指揮官となるなど、長府藩と壬辰・丁酉倭乱との関わりは深い¹⁹。また、秀吉一行が京都から肥前名護屋に向かう途中、長門国府において神功皇后・仲哀天皇の社祠を拝するなど、神功皇后の「出征」譚に示されるように、長府自体が歴史的に見ても朝鮮半島との関わりが深い地域でもあった²⁰。

さて、下関市立長府博物館に「藩中略譜」²¹という史料が保管されている。この史料は、長府藩における家老から馬廻クラスまでの藩士家の由緒を罫紙に記録し、家名をイロハ順に並べて4冊に分けて整理したもので、途中断絶した家まで含めると約400家の由緒が記載されている。とくに養子縁組・婚姻について詳細に記録されており、長府藩士の縁戚関係について近世初頭からほぼ網羅的に明らかとなる史料である。作成年代については、由緒の末尾に西南戦争に関わる記述を含む家も見られることから、およそ明治10年代であろうと思われるが確定はできない。成立の背景についても、内容が馬廻クラス以上の家の記

16 鶴園前掲論文（註14）。

17 長府藩は明治2（1869）年に「豊浦藩」と改名するが、本稿では便宜上「長府藩」と呼ぶこととする。

18 菱屋平七「筑紫紀行」巻3（『日本紀行文集成』1、日本図書センター、1979年）、627頁。

19 町田一仁「概説 東アジアのなかの下関—近世下関の対外交渉」（図録『特別展 東アジアのなかの下関—近世下関の対外交渉』所収、下関市立長府博物館、1996年）。

20 北島万次「秀吉の朝鮮侵略における神国意識」（『歴史評論』438、1986年）。「出征」譚とは、神功皇后が新羅を武力で侵略し征服したという伝説のことで、歴史上、日本が朝鮮との武力的接触を持ったたびに様々なかたちで再生することとなった。

21 以下「略譜」と省略する。

録に止まっていることから、同藩における土族授産政策と何らかの関係があるかとの推測はできるものの、詳細については不明である。

この「略譜」にも、長府藩士によって連行されてきた朝鮮人被虜に関する記述がわずかに残されている。

【資料1】

瀧 本氏佐伯

佐伯喜右衛門、秀元公ニ仕フ、朝鮮ノ役ニ鮮兵ノ鼻百ヲ削リ来ル、外ニ生獲三人、其功ヲ証ス、時ニ兵三百五拾人ヲ属セラル、子實方瀧左兵衛ト称ス、實方ノ時ニ至リ鮮民三人尚家ニ在リト云、(後略)

〔註〕読点は筆者による

瀧氏の先祖佐伯喜右衛門は、秀元の朝鮮出兵に参加し、鼻切りで朝鮮兵100人の鼻を削ぎ、また生け捕った朝鮮人3人を長府に連行していた。その3人は喜右衛門の子實方の代にもまだ瀧家居宅にいたとあるため、彼らは家臣もしくは奴僕として瀧家に仕えていたと思われる。その他、同藩では藩祖秀元が朝鮮から連行した陶工によって、長府逢坂の松風山窯が開窯してもある。長府藩においても、日本に連行され、何らかのかたちで生活していた朝鮮人被虜の数は少なくなかったと思われる。

(2) 乃木家の祖「朝鮮国ノ人」

「略譜」には、外国人系の出自を主張する由緒を持つ藩士が3家ほど見られた。「漢靈帝ノ裔婦化シテ伯州ニ在ル者ヲ祖トス」とした原田家(旧姓、大蔵)、「秦氏ハ秦□公ノ裔婦化シテ山城ノ国ニ在ル者ヲ祖ト為ス」とした上田家(旧姓、秦)、そして乃木家である。

乃木家は、長府藩において代々藩医を勤めた家柄で、幕末には馬廻役を勤め、江戸末期には乃木希典を輩出する家である。乃木希典といえば明治時代の代表的な陸軍軍人で、日清戦争では旅団長として旅順を攻撃し、その後台湾総督や第11師団長などを歴任して、日露戦争では旅順攻撃で5万人以上の将兵を失いながらもロシア軍を破るなど活躍。日露戦後は、戦争の悲運を象徴する将として敬慕をうけ、「聖雄」「軍神」として語り継がれて、多くの伝説を生んだ。また明治天皇の崩御に際して妻とともに殉死したことから、当時その忠節の偉大さが感銘を呼び各地に乃木神社が創建され、現在でも乃木会の活動を中心に崇敬する人は多い²²。

それでは、早速「略譜」に記載された乃木家の由緒を見てみよう。少々長文になるが、

22 松下芳男『乃木希典』(吉川弘文館、1960年)、佐々木英昭『乃木希典—予は諸君の子弟を殺したり—』(ミネルヴァ書房、2005年)など。

全文を引用する。

【資料2】

乃木 姓源 本氏佐々木

但馬国某ノ村ニ乃木谷ト称スルアリ、朝鮮国ノ人、豊太閤ニ從フテ帰化スルモノ古田織部ノ管護スル所トナリテ乃木谷ニ居リ、其土人ニ通シテ一男子ヲ得タリ、其子長シテ自ラ佐々木三太夫源冬純ト称ス、或ハ云、母ノ家ヲ佐々木ト称ス、冬純金山豊春ノ女ヲ娶リ一子ヲ得タリ、医ヲ学ヒテ佐々木瑞昌ト称ス、瑞昌当藩ニ仕フ、乃木傳庵ト改ム、傳庵男子無シ、宗対馬守ノ臣打它寿庵ノ子瑞心ヲ養フテ聳ト為ス、母ハ加島樵八ノ女ナリ、対馬藩、瑞心二子アリ、兄ハ道伯、弟ハ隨陽、道伯ハ重就公ニ從フテ萩ニ入ル、隨陽匡敬公ノ小性ニ召出サル、新右衛門ト改称ス、以テ瑞心ノ家ヲ此藩ニ存ス、後チ故アリ断絶ス、更ニ松平豊後守ノ藩医烏山松周ノ子ヲ以テ道伯ノ嗣ト為ス、是ヲ寿伯庸貞ト称ス、寿伯死シテ嗣子無シ、藩人宗岡慶隆ト称スル者江戸ニ在リ、以テ寿伯ノ嗣ト為ス、是ヲ乃木隆伯ト称ス、隆伯三子アリ、第一文國病アリテ家ヲ続カス、第二栄次郎國嶋傳右衛門ノ養子ト為ル、第三龍玄、或ハ隆玄ニ作ル、家ヲ続ク、子無シ、乃木次郎左衛門希健ノ三男希幸ヲ萩ヨリ迎へ以テ嗣トナス、因テ医業ヲ免ス、惣吉ト称ス、又子無シ、其弟喜十郎希吉ヲ以テ嗣子ト為ス、希幸ノ母内藤備後守ノ臣烏田松秀女ナリ、希吉ノ母ハ大久保安芸守ノ臣野村オ右エ門利久ノ女ナリ、希吉ノ子希次源太郎ト称ス、母ハ隆玄ノ女ナリ、希次家ヲ嗣クニ及ハスシテ死ス、希吉射ヲ善クス、弓馬ノ事ニ於テ悉ク其故実ヲ窮メ蘊奥ニ至ラサル莫シ、元義公ヨリ仕入テ四世ニ至ル、其間亦清末侯ニ伝タリ、後妻ノ子三男アリ、第一

〔註〕読点は筆者による

見ての通り【資料2】は後欠の史料で、残念ながら希典は登場しない。また、「略譜」には2家の乃木家が記されている。しかし、こちらがのちに希典を輩出する乃木家の系譜であることは、「希」の一字を代々受け継いでいる点、また諸書に記されている系譜との比定からも間違いない。

まずその内容を見ていこう。その冒頭部分には、「但馬国の某という村に乃木谷というところがある。朝鮮国の人で豊太閤（豊臣秀吉）に連れてこられて帰化した者が、古田織部に監護されながら乃木谷に住んでいた。（彼は）地元の住民と結婚して一人の男子を得た。その子は成長して、自ら佐々木三太夫源冬純と名乗った。（中略）冬純は、金山豊春²³の娘を娶って一人の子を得た。（その子は）医学を学んで佐々木瑞昌と名乗った。瑞昌は当藩（長府藩）に仕えて（名前を）乃木傳庵と改めた」とある。

23 「略譜」には、金山氏の項はあるものの「豊春」の名前は出てこない。

この史料から、乃木家が壬辰・丁酉倭乱によって拉致連行された朝鮮人被虜を祖先にもつ家系であったことがわかる。この「朝鮮国ノ人」は何者かによって日本に連行され、古田織部による監護のもと、地元住民から特別に隔離されない環境で生活していたようである²⁴。なお「乃木谷」の場所の特定は出来ていないが、朝鮮人被虜が古田織部の領地でもない「但馬」に身を置いていた理由として、当時但馬竹田城主であった赤松広通との関係が類推できる。広通は、もと西播の小領主であったが、秀吉に服属して但馬竹田2万余石を与えられ、関が原の戦いの後に自刃してしまう武将である。実は彼は、姜沆や藤原惺窩とも交流が深く、儒教を単なる学問思想として受け取るのではなく、その礼式や生活様式にとどまらず、科举制度などの社会制度まで倣おうとしたほどの儒教信奉者であった²⁵。この広通と「朝鮮国ノ人」が、ともに但馬で過ごした時間は僅かにすぎず、両者の関係については憶測の域を出ないが、瑞昌（乃木傳庵）が元禄期に長府藩「儒医」として仕えていることから²⁶、「朝鮮国ノ人」と「佐々木三太夫源冬純」は、ある程度朝鮮朱子学に通じた人物であったとの推測はできよう。乃木家もまた「文の世界」で身を立てた家の一つであった。

(3) 希典の位置

次に、この由緒書を整理し、希典の位置を確定する作業を行う。【資料3】は、【資料2】と「略譜」に記載されている他家の由緒、そして「略譜」の系図版として下関文書館に保管されている家系図をもとに作成した乃木家の系図である²⁷。これをもとに、既述した瑞昌（乃木傳庵）以降の系譜を辿ってみよう。

瑞昌には男子がなく、宗対馬藩士である打它壽庵の子瑞心（瑞友、瑞庵）を養い婿に迎えた。江戸初期においては、朝鮮人被虜の家系ということで、乃木家と朝鮮との交渉役であった対馬藩との間に何らかの関係があったのかもしれない。瑞心は朝可と隨陽という2人の男子を得ている。兄の朝可（乃木道伯）は、毛利萩藩8代藩主重就に（おそらくは医師として）付き従って萩に赴任し²⁸、弟の隨陽（乃木新右衛門）が、小姓として長府藩主時代の重就（匡敬）に仕えて本家を継ぐが、後に断絶している。では、朝可が萩に赴任し

24 茶の湯を嗜んだ古田織部との関係は、被虜と茶の湯（織部焼）との関係もうかがわせる。

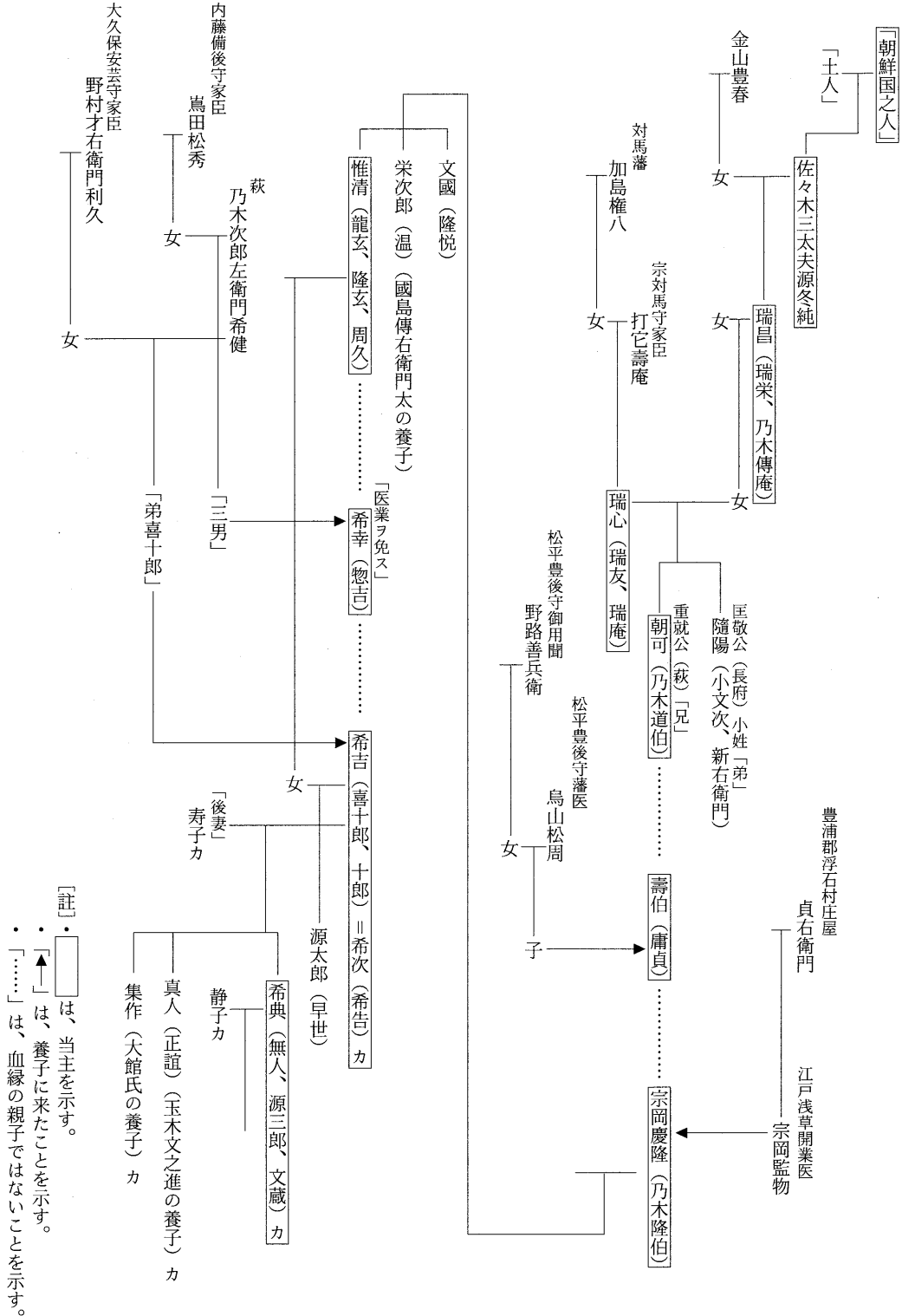
25 衣笠安喜「近世日本の朝鮮観」（井上秀雄・上田正昭編『日本と朝鮮の二千年』1、太平出版社、1969年／同『近世日本の儒教と文化』所収、思文閣出版、1990年）。

26 元禄年間に長府藩「儒医」として「世人扶持金」30両が支給されていたことがわかる。『下関史料叢書29 長府藩分限帳』（下関文書館、1987年）を参照のこと。同史料については、以下、『分限帳』と省略する。

27 以下、「系図」と省略する。「略譜」とワンセットで作成されたものと考えられる。

28 重就は長府藩主匡広の十男として生まれるが、兄たちが次々と早逝したために、享保20（1735）

【資料3】乃木家系図



た後、長府藩医としての乃木家（分家）を継いだのは誰なのか。この部分についての詳細は不明であるが、「系図」によると、萩に赴任した兄朝可が、松平豊後守に仕えていた医師烏山松周の男子である庸貞（壽伯）を養子として迎えて家を継がせたと思われる²⁹。しかし、この庸貞にも男子はなく、豊浦郡浮石村庄屋貞右衛門の子で江戸浅草において開業医をしていた宗岡監物（慶隆）が跡を継ぐこととなり、彼は乃木隆伯と名乗って長府藩医を勤めた。この隆伯には3人の男子があった。うち長男文國は早くに病死し、次男栄次郎も、代々清末藩の医師を勤めて当時長府で儒学を生業としていた國島傳右衛門太のもとへ養子に出されている³⁰。家督は三男の惟清（龍玄、隆玄）が継ぐが³¹、また彼にも男子は無かった。そこで今度は、萩の乃木次郎左衛門希健の三男希幸（惣吉）を養子に迎えて家督を継がせ、ここで代々勤めてきた藩医も辞している。この希幸にも男子がなかったため、希幸の異母弟である希吉（喜十郎）が家督を継いだ。

さて、この希吉であるが、「略譜」「系図」には記述がないものの、実は乃木希典の父希次と同一人物である可能性が高い。かかる論拠は以下の3点である。まず、「略譜」に「元義公ヨリ仕入レ四世ニ至ル」とあることから、希吉は、毛利元義が11代藩主を退く天保12（1841）年以前から、元敏が14代藩主に就く慶応4（1868）年3月以降までは確実に藩に出仕していたことがわかり、これは明治10（1877）年に没する希次の年代とほぼ一致すること³²。次に、その前後に長府藩の分限帳に名前が出てくるのは、文政年間に100石を支給されている「乃木十郎」、天保15（1844）年に馬廻として50石を支給されている「乃木希十郎希吉」、安政年間に馬廻として50石を支給されている「乃木十郎」であり³³、

年に長府藩8代藩主匡敬として家督を相続した。しかし、宝暦元（1751）年には、萩の宗藩7代藩主宗広が早逝し世嗣がないため、萩宗藩8代藩主重就として家督を相続することとなり、萩藩中興の祖として藩政改革を実現させる。詳細は、小川國治『毛利重就』（吉川弘文館、2003年）を参照のこと。

29 宝暦13（1763）年に乃木寿伯は御医師として200石を支給されていた（『分限帳』）。

30 ちなみに、この栄次郎が後に國島家を出奔してしまったため、父隆伯は心を痛め、瀧部村庄屋山田次右衛門の子の捨介の「学識アルヲ聞キ」、あらためて養子に迎え、さらに出奔した栄次郎の代わりに國島家へ養子に出し、その家督を継がせている（「略譜」、國島氏の項）。学問を生業とする藩士家における養子の重要性、身分格式の高下を問わない能力主義といった養子縁組の特性がうかがわれて興味深い。

31 惟清については、「後チ乃木 源周久ト称ス、系乃木氏ニ入ル」（「略譜」、宗岡氏の項）とある。周久は、松下掲書所収の系図によると、隨陽の孫に当たるが、同一人物かどうかは不明である。なお、「系図」の父隆伯の項には「出宗岡系」とあり、隆伯・惟清の2代をかけて宗岡家の家系から乃木家の家系に移ったものと思われる。

32 明治3（1870）年には、すでに乃木文蔵（希典）が馬廻として100石を支給されている（『分限帳』）。

33 それぞれ『分限帳』より。

「十郎」や「季十郎」といった字（あざな）を持つとされる希次と酷似していること³⁴。最後に、「略譜」に「希吉射ヲ善クス、弓馬ノ事ニ於テ悉ク其故実ヲ窮メ蘊奥ニ至ラサル莫シ」（希吉は弓術に長けている。弓術や馬術などについては、その故実を極めており、極意に達していないものはない）と注記されていること。希典の父希次が、長府藩において名を馳せるほどに文武（とくに武術）に長けていたこと、またその厳格な躰によって後の希典の古武士的な性格が醸成されたということも、大正・昭和期の教科書に載るほど一般的に知られた話であろう³⁵。以上の論拠から、希典の父希次と「略譜」の希吉が同一人物である可能性は高い³⁶。そうすると、【資料3】に図示しているように、史料最終段に登場する「後妻」が希典の母寿子（土浦藩士長谷川金太郎の娘）を指し、その末尾部分で後次となっている「三男」のうちに希典（源三郎、文蔵）が含まれることになる³⁷。

乃木希典は、壬辰・丁酉倭乱における朝鮮人被虜を先祖に持つ乃木家の家系のなかに身を置いていた。今回「略譜」と「系図」からは明らかにならなかったが、希典の祖父乃木次郎左衛門希健の父親が、重就公に付き添って萩に赴任した朝可（乃木道伯）である可能性も高い³⁸。となると、希典は「朝鮮国之人」から数えて直系の8代目ということになる。

以上、乃木家が明治10年代まで朝鮮人被虜の末裔としての由緒を有していたこと、そして希典自身もその由緒の中にいたことは確かである。東アジアにおける戦争の最先鋒として活躍した日本を代表する「聖雄」「軍神」が、壬辰・丁酉倭乱による朝鮮人被虜の末裔とはなんと皮肉なことであろうか。

おわりに

近世日本における朝鮮観については、これまでいくつかの研究がなされてきている。対象を「知識人」と「民衆」という2層に分け、それぞれの朝鮮観について整理しておく。

まず「知識人」層においては、近世初期の段階では友好的であった朝鮮観が、早くも17

34 「十郎」「季十郎」といった字^{あざな}については、松下前掲書（註22）を参照のこと。ちなみに、乃木家に希吉（希次）以外で「十郎」の字を持つ者はないため、彼は文政年間からすでに長府藩に出仕していたと考えられる。

35 佐々木前掲書（註22）。

36 原史料の字体から確定することは難しいが、そもそも「略譜」中の「希吉」が、実は「希告」（まれつぐ）という可能性もある。

37 ちなみに、史料末尾の「第一」の子が希典を指し、その後に次郎（萩藩士玉木文之進へ養子）、集作と続くと思われる。

38 松下前掲書（註22）においては、希次の父希健は、萩に赴任した乃木道伯の子となっている。今後、萩藩側の史料からも両者の関係を追究する必要があるだろう。

世紀後半から変化し始めたとされる³⁹。たとえば、近世初期には儒教の仁政思想の立場から強烈に非難された壬辰・丁酉倭乱についての評価も、山鹿素行においては神国思想に裏付けられた「日本ナショナリズム」のもとに、「文武ともに日本に及ばない」朝鮮国ゆえに秀吉が「朝鮮征伐」を行ったという朝鮮を蔑視した評価に変わった⁴⁰。朝鮮儒教が18世紀初頭にはその創造性を失い、日本の知識人がそこから得るものがなくなってくるとともに、彼ら知識人の朝鮮観も歪曲の一途を辿ったという。次に、「民衆」層においてであるが、これについては、大きく2つの見解に分けうる。朝鮮通信使来日時に発生した事件を題材とした演劇の分析をもとに、近世「民衆」は「武威」を根拠に朝鮮人に対して優越しているという自我意識を持つが、それらは単一な認識ではなく、個々の単位における尊卑の感情には地域差・階層差があるとした見解（池内敏）⁴¹と、朝鮮通信使を通して当時の朝鮮観を論じる手法に対して、「朝鮮に関する知識の多様な要素」を検討することの必要性から近世における神功皇后伝説の影響について分析し、近世「民衆」に朝鮮を畜生視するというこの層独自の蔑視観が根付いていたとする見解（塚本明）⁴²である。

近世における「知識人」と「民衆」の大半が、朝鮮に優越するという自我意識・蔑視観を持っていたということは、これまでの研究史に共通している。ただ、だからといって皆が皆その大勢に乗じていたかといえば、そうではない。池内敏氏が指摘するように、やはり地域差・階層差の問題には留意しておく必要がある。

第1章で検討した被虜たちと同じく、乃木家もまた朝鮮人被虜としての由緒を維持しつづけていた。そして、当初はやはり「文の世界」の役職に就いていたが、後には馬廻という「武の世界」の役職に転向している。また養子・婚姻関係を見ても、医者という職業のために優秀な人材を獲得することが優先されたのか、藩内外の武士や百姓家など広く結ばれており、出自によって差別されたという形跡は見出せない。乃木家は、日本の武士社会に単に「同化」するのではなく、朝鮮人であることを内外に意思表示しつつ、絶妙のバランス感覚でもって「融合」していたといえる。自身の随筆で朝鮮に対する蔑視を顕わにした藩士の事例なども見られるが、これは「無理解」も相俟って朝鮮朱子学を批判したものにすぎず、日本で生活する朝鮮人の末裔への蔑視という思考には行き着かない⁴³。やはり近世武士社会においては、彼ら個人を朝鮮人被虜の末裔ということだけで公然と差別する

39 衣笠前掲論文（註25）、矢沢康祐「江戸時代における日本人の朝鮮観について」（『朝鮮史研究会論文集』6、1969年）。

40 「謫居童問」（『山鹿素行全集』思想篇12、岩波書店）。

41 池内敏「近世後期における対外観と「国民」（『日本史研究』344、1991年）、同『唐人殺し』の世界—近世民衆の朝鮮認識—（臨川書店、1999年）など。

42 塚本明「神功皇后伝説と近世日本の朝鮮観」（『史林』79-6、1996年）。

43 天野信景「塩尻」（『日本随筆大成』〈新版〉第3期第16巻、424頁／同第14巻、176頁）。

といった社会的基盤は持ち合わせていなかったといえよう。

ところで、壬辰・丁酉倭乱における朝鮮人被虜の末裔としての乃木希典については意外に知られていない。これはなぜだろうか。沙沙貴（ささき）神社（滋賀県蒲生郡安土町）には、明治後期に奉納された乃木家の由緒が残されている。公式の由緒において希典は、佐々木源氏を祖とする純粋な日本人、佐々木四郎高綱の末裔として描かれた。勿論、但馬「乃木谷」に住んでいた朝鮮人被虜「朝鮮国ノ人」に関する記録もない。明治43（1910）年の「日韓併合」に行き着く朝鮮半島への一貫した政策のもと、大日本帝国の「聖雄」「軍神」がかつての朝鮮人被虜の末裔であるという「皮肉」は時代に不適合であった。ゆえにその事実は抹消され、現在まで乃木家の歴史は、国民に都合が良いように捻じ曲げられたままなのである。

幕末、「知識人」層においては、佐藤信淵が統一国家論のもとに海外侵略の論理を、帆足万里が南進論を唱え、吉田松陰・橋本左内・平野國臣など尊攘派の志士たちもそれぞれ大陸への侵略論を展開し、これらは征韓論にまで行き着いた⁴⁴。また、「民衆」の間にも、神功皇后伝説に基づいた朝鮮蔑視観が根強く残っており、これが征韓論を支える基盤になったともいわれている⁴⁵。しかし、一方で乃木家が、明治10年代頃までは朝鮮人被虜の末裔としての由緒を内外に主張していたことは明らかである。乃木家は、征韓論が席卷する社会情勢のもとにおいても依然として日本社会との「融合」を維持し続けており、壬辰・丁酉倭乱における朝鮮人被虜の末裔という出自を手放さなければならない事態に陥ることはなかったといえよう。ところが、明治後期に乃木家の由緒が大きく書き換えられたことからわかるように、その後の乃木家を取り巻く社会情勢は「融合」さえ許さず、ただ日本社会に「同化」する道しか残さなかった。乃木家の由緒を通して見た時、日本社会における朝鮮人観についての大きな転換点が明治後期に存在したことがうかがえるのである。

この転換から想起されるのは、韓国併合前後になされた降倭をめぐる歴史家たちの議論である。降倭とは、壬辰・丁酉倭乱において、明・朝鮮側に投降した倭将卒のことである。なかでも沙也可（＝金忠善）はよく知られている。彼は、加藤清正の先鋒として従軍するも、朝鮮の習俗・文化に傾倒し、朝鮮側に投降して功労を立てたことで朝鮮国王から官職と姓を賜い、乱後も朝鮮に仕えたとされる。ところが、韓国併合前後、この沙也可の存在自体が特定の歴史家たちによって否定されようとしたことがあった⁴⁶。現在ではすでにその存在は証明されているが、同時期に乃木希典の由緒が書き換えられたことも、当時の歴史認識の歪みと無関係とは言えまい。現代にも依然として残る歪んだ朝鮮人観は、古代以

44 衣笠前掲論文（註25）。

45 塚本前掲論文（註42）。

46 北島万次「『乱中日記』にみえる降倭について」（北島前掲書（註1）、第3章）。当時、沙也可の存在を否定した歴史家のなかには、沙也可を「非国民」と断じた者もいた。

来のアプリアリな朝鮮蔑視観からのストレートな延長線上に位置づくものとしてではなく、荒んだ「侵略」の歴史によって醜く「変質」させられた、近代日本の産物として捉えられるべきではないだろうか。

(神戸大学大学院文化科学研究科 日本史学専攻)